

氏名	稲毛 和子
学位の種類	博士（社会学）
報告番号	甲第564号
学位授与年月日	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日 文部省令第9号） 第4条第1項該当
学位論文題目	〈わたしにしかわからないもの〉と「伝達する身体」 ——「寛解者の社会」のライフストーリー研究
審査委員	（主査）小倉 康嗣 吉澤 夏子 前田 泰樹 木下 康仁（聖路加国際大学大学院看護学研究科特命教授） 有末 賢（亜細亜大学都市創造学部教授）

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

本論文は6章で構成されている。

第1章「二つの疾患のフィールドワークから——線維筋痛症・多発性硬化症患者から『寛解者』たちへ」では、著者自身が患った病いによる「痛みの経験」と、線維筋痛症・多発性硬化症患者が直面する〈症状の不可視性〉を「問題経験」として捉えたフィールドワークの経験によって生成された本論文の問題意識が記される。第2章「〈わたしにしかわからないもの〉と後期近代」では、本論文の理論的・状況的背景が論じられ、軸となっていく感受概念である〈わたしにしかわからないもの〉と本論文の問いが設定される。第3章「ライフストーリー研究による〈わたしにしかわからないもの〉への接近」は、本論文が採用する方法論としてライフストーリー研究の特性と必要性が説かれる。第4章「何が彼女の『痛み』であったのか——Eさんのライフストーリー」と第5章「〈偶発的なもの〉との共生——Tさんのライフストーリー」は、本論文の中核を成す部分で、線維筋痛症を患うEさんと多発性硬化症を患うTさんの「痛みの経験」と、それを受けとめていく複雑な人生のプロセスが、5年間にわたる著者との対話的・相互的インタビューによって描出される。第6章「〈わたしにしかわからないもの〉と『伝達する身体』」は結論部になる章で、新たに発見された〈わたしにしかわからないもの〉をめぐる認識と同時に、調査協力者である二人を「伝達する身体」であると著者が認識した理由が明らかにされ、その意味と意義が論じられる。

(2) 論文の内容要旨

本論文は、線維筋痛症や多発性硬化症という〈症状の不可視性〉を特徴とする難病をもった二人の調査協力者の「痛みの経験」と「他者との問題」に焦点をあて、そこに生成する〈わたしにしかわからないもの〉の外縁と内実を、5年間にわたる著者（調査研究者）と調査協力者との対話的・相互的なライフストーリー・インタビューの時間的変容を通して明らかにしていくことによって、自己物語形成の困難を抱える後期近代社会において個人の固有な経験がもつ人間的・社会的意味と、それを他者や社会がどのように尊重し育ていけるのかを考察したものである。

第1章では、表象不可能性・理解不可能性を痛感させる著者自身の身体的な「痛みの経験」から、痛みを症状とする人びとの生活世界への問題関心が生まれ、〈症状の不可視性〉を疾患特性としてもつ線維筋痛症と多発性硬化症という二つの疾患の存在を知っていく経緯が記される。著者は、このような〈症状の不可視性〉を「問題経験」として見る構えでフィールドワークを始めるが、そのような見方では患者の一側面しか捉えられないことに気づく。そこから、病者と健常者といった医学的な二分法で区別可能ではない人びとの存在を捉えるA. W. Frankの「寛解者（の社会）」概念を両疾患患者を統合して見る視点として導入し、「寛解者」が個人的な物語を紡ぎ保持していくプロセスとその「生の経験」を見ていくという問題意識に到達する。

第2章では、自己物語形成の困難を抱え、「経験の隔離」(A. Giddens)によって生の道徳的・実存的意味を問いなおす経験や時間の価値が貶められた後期近代という時代の確認とともに、このような時代においては、生の道徳的・実存的意味を問いなおす痛みや病いや障害といった経験は歓迎されざるものとして受けとめられることを指摘する。しかしフィールドワークで出会った調査協力者は、人生において避けられない偶発性に「不幸」や「被害」という態度をとっていないように思われた。そこから、どのように偶発性ととも生きてきたのか、生きているのかという疑問が著者に生じ、5年にわたって身体—自己に関する語りを聞いていくことになったわけだが、その対話はのちに、著者が調査協力者たちのことを、偶発性を生の要素として受け入れた「伝達する身体」(A. W. Frank)であると感知する過程でもあったことが示唆される。調査協力者がなぜ偶発性ととも生きていけるのか。そして調査者である著者がこのように感じるのはなぜなのか。それを明らかにするために、〈わたしにしかわからないもの〉という「感受概念」(H. Blumer)をもって調査協力者の生の固有性への接近を試みるのが宣言される。そしてそこから、なぜ二人の調査協力者が「伝達する身体」であったのかという観点とともに〈わたしにしかわからないもの〉をめぐって生成された認識とその意味を明らかにする、という本論文の問題が設定される。

第3章では、本論文が採用するライフストーリー研究法の説明とその必要性について論じる。調査協力者の特性でもある「寛解者」とは、生涯にわたって変化する身体とアイデンティティを模索、選択していく存在であり、ライフストーリー研究がもつ「人生という時間性」の視点が必要不可欠である。また、ライフストーリー研究では調査者と調査協力者のコミュニケーション過程それ自体を考察の対象とするが、コミュニケーションには言語を越えて〈つい伝わってしまう〉という「人間の意識的制御を越えた」「本質的な側面」(菅野仁)がある。本論文のライフストーリー・インタビューが、このようなコミュニケーションによって進行していった過程であることが示される。

第4章では、線維筋痛症を患うEさん(30代女性)のライフストーリーを記述し、考察する。Eさんには、彼女が子どもの頃からリウマチの痛みで苦しんできた母がいて、その母との関係性が彼女の人生に大きな影響を与えていた。Eさんのライフストーリーは、彼女が「痛みの当事者」であり、かつ長年にわたり母の痛みに対する無力さに苦しんできた「痛みの他者」でもあることに、調査者である著者が長い時間をかけて気づいていくことによって展開していく。

そのなかで、子どもの頃から母の「サポート」(介護、介助)の担い手であったEさん自身が痛みの病いを経験したことで、これまでの人生にあった「サポート」という行為に新たな意味が生まれ、長年にわたって苦しんできた母の痛みへの認識に新たな解釈を与えていったことが明らかにされる。それは一つに、ここまで母が生き延びてきた強靱な「精神力」「相当な頑張り」を尊敬し、母の面倒をみていくことへの覚悟、つまり「サポート」への能動性が生まれていることであり、もう一つは、母の痛みへの冷静な観察と、それがもたらす「不憫」という感情の変化、不憫だけではない母という新たな理解である。子どもであったEさんにとって、母の痛みや病いは脅威であったが、今は母がもつ〈わたしにしかわからないもの〉の世界の構成を彼女が「知っている」。このことが、幼い頃から抱えてきた脅威を和ら

げ、母とのコミュニケーションに能動性を与えているとしたら、それこそが彼女にとっての〈わたしにしかわからないもの〉であるということ、著者は発見していく。当初Eさんの疾患の痛みを聞くために始まったインタビューは、最終的に彼女の人生の「痛み」とは何なのかを知るプロセスとなった。

第5章では、多発性硬化症を患うTさん(30代男性)のライフストーリーを記述し、考察する。Tさんと著者とでは〈偶発的なもの〉の捉え方に圧倒的な差異があることに気づいていくことが、本章の軸になっている。Tさんは多発性硬化症が疑われた最初の違和感を感じ一時入院してから14年後にようやく確定診断を得た。その間彼には医学的な症状だとは思わなかった体調不良や歩行にかかわる後遺症があり、それに悩まされてきた。だが彼は、医学的な治療に至らず疾患を「14年放置」したことを後悔の文脈では語らなかった。本章の前半は、この「14年放置」を後悔の文脈で語らないことへの著者の疑問によって進行し、後半は、顕著に進んでいく脚の状態の悪化を「喪失」として捉えない、彼の〈偶発的なもの〉への態度に対する著者の疑問によってライフストーリーが展開される。

そのなかで著者は、以下の諸点を発見していく。Tさんの生き方は、人生で何を「選択」するかではなく「与えられた状況」がもつ「意味」を見つけていっていること。〈医学的なもの〉に正当性があり「医学的な語り」に優勢さがある後期近代社会において、〈医学的なもの〉で解決できない世界と時間とともに生きていること。「ありたい自分」から自由になろうとしている時間の存在。お金を得ることや自分の能力を高めることから、「橋渡的な存在」として人との「あいだに入ること」にやりがいやおもしろさをもつようになった姿。Tさんの〈わたしにしかわからないもの〉の世界は、〈医学的なもの〉では解決できない世界とともに生きてきたことで積み重なっていった価値や判断、意味の体系に成立している。他方で逆照射されたのは、「14年放置」を後悔の文脈で捉えてしまっていた著者の認識であり、〈医学的なもの〉で解決できない世界を聞きとれなかった著者も、〈医学的なもの〉で解決されないものが言語化・共有されにくい後期近代の時代状況に巻き込まれ、「寛解者」たちの経験の不可視化に加担していたことであった。著者とTさんの相違によって進んでいくインタビューは、後期近代に巻き込まれている生と、そこから自由になっていく生との対話であった。

第6章では、二人の調査協力者の〈わたしにしかわからないもの〉への接近によって記述されたライフストーリーを踏まえ、〈わたしにしかわからないもの〉の性質をめぐって新たに発見された認識が提示される。それは第1に、〈わたしにしかわからないもの〉は〈つい伝わってしまう〉もの、つまりコミュニケーションの俎上にあがるもので、伝達可能性をもつこと。第2に、身体—自己の世界の輪郭(表象や理解不可能性を痛感させる身体的な「痛みの経験」)を意識することで培われた、他者にはわからないものがあるという感覚こそが、他者を理解する実践と分ちがたく結びついているということ。その意味で第3に、〈わたしにしかわからないもの〉は固有なものであるにもかかわらず、他者へ〈つなげる・つながる実践〉に向かっていくということ。ゆえに第4に、〈わたしにしかわからないもの〉は、後期近代の価値観や時代の特性が生み出す有用性や生産性、「他者化という魔術」(J. Young)による「ひび割れ」や分断の生産・再生産とは、相対するものであるということ

と、である。また、二人の調査協力者が「伝達する身体」であるといえるのは、二人が自身の身体—自己の世界から、「目の前にはいないが、今きっとどこかで苦しんでいる他者」を想像して語っていることを、聞き手＝調査者である著者が感じてきたからであった。

著者が本論文で実践してきた対話は、他者の語りの理解を試みることで「私をもたない理解の方法」や「異なる人生や生活、価値」を「私の心のなか」に住まわすことであった。心のなかに私とは別の理解があってもよいと許せること、いまはもたない何かを想像できること、それを繰り返して想像の編み目を構築していくことで、社会への信頼（感）を心のなかに形成していくことが、個人が望む多様な生き方を実現可能にし、個人の「痛み」を包摂する受け皿としてあるべき社会にとって必要なものであると結論づけて、本論文は締めくくられる。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文の最大の特徴は、調査協力者と調査研究者である著者との対話的相互行為の時間的な積み重ねによる知見（気づき）の生成性によって、調査研究過程とその記述である本論文がきわめてダイナミックに展開しているところにある。調査研究者である著者自身の生と認識も記述の俎上に載せることで、調査協力者の生と調査研究者の生の相互作用による語りの生成とその解釈・考察に緊張感をもたせている。調査協力者への5年にわたる丹念なインタビューのプロセスで気づかされる「異なる価値」「ひっかかり」を重視し、そのなかで問いと調査研究の構えが再帰的に編みなおされ、そのプロセス自体が発見された知見として濃密に記述され、考察されている。ライフストーリー研究がもつ生の時間的生成性への接近と対話性が着実に取り入れられ、それが調査・記述・解釈・考察の諸側面において展開されている。

と同時に、その背景にある歴史的社会的状況認識として、先行研究である A. W. Frank や障害学、また後期近代化論の Z. Bauman、A. Giddens、J. Young 等の議論を援用しながら、調査協力者の自己と調査研究者の自己およびその関係性を位置づけており、現代社会学理論とライフストーリー研究の方法論を融合させた論文になっている。本論文の問いの根底にある後期近代の課題を「語りなおし」の時間の尊重に置きつつ、この論文において調査協力者だけではなく、著者自らも「語りなおし」の時間を獲得していく過程を描ききり、知見に説得力と切実さをもたらしている。

(2) 論文の評価

本論文には、以下のような評価が与えられた。

第1に、難病をもち当事者以外にはその生の経験が理解されにくい二人の調査協力者を中

心に、5年間にわたり濃密なインタビューをおこない、その時間的経過のなかで生じ、あるいは認識されていく複雑な経験の文脈性を、ライフストーリーとして繊細かつダイナミックに記述した力作である。このような記述の仕方によって二人の調査協力者について深く知ることができ、同時にそれは、この二人の二様の人生の理解だけでなく、人が社会で生きるとはどういうことであるかを考えさせる力強さがある。〈わたしにしかわからないもの〉をめぐる経験の固有性とその意味を豊かに描いており、一級の質的調査研究であるといえる。

第2に、ライフストーリー研究の対話的な相互性と生成性がいかんなく発揮されている。とくに、調査研究者である著者自身を積極的に登場・参加させることで調査協力者の語りを理解しやすいものになっている。二人の調査協力者についてよく理解できるのは、5年間という時間のなかでのそれぞれの「変化」が示されているからであるが、それは調査研究者である著者自身の解釈の変化でもある。それらが、対象化しての変化ではなく、著者のインタビューを経ながらの解釈の変化として示されており、自身の解釈の支点を固定化せず浮動化させ、共鳴・共振的な幅をもった解釈を試みていく緊張感がある。たんなる聞き手としてではなく著者自身の「痛みの経験」を媒介とすることで解釈を深めており、調査研究者である著者自身が調査過程で「伝達する身体」の意味に気づき、知を形成していく過程が描きだされ、「病いの語り」から「他者へ、社会へ伝えていく語り」へと構成されていくさまは感動的である。

第3に、論文全体として、第1章の問題関心のありか、第2章の後期近代を焦点化する理論的叙述、第3章の方法論の説明、そして第4章以降のライフストーリー・インタビューの展開とその記述が、調査研究者である著者の実存的な問いを軸に過不足なく有機的に組み立てられている。著者自身の身体への向き合い方と関連づけられて考え抜かれ、無駄なものがない濃密な叙述になっている。理論的な議論と質的調査の知見が結びついたというところに美しさがあり、審査による修正要求にもとづいた改稿の努力によって内容と方法論が統合されていった。

第4に、以上のような本論文の特性は、発見され、考察された知見に広い理解をもたらしている。たんなる身体的な痛みが、生き方や他者との関係性を含んだ「痛み」となり、〈わたしにしかわからないもの〉が、人が生きていく意味へといっきに広がっていく。固有なものであり他者に対して閉じているものだと認識していた二人の調査協力者の〈わたしにしかわからないもの〉が、他者につなげる・つながる実践に向かっていたという発見は、個人的な痛みが社会的な「痛み」になりうる可能性を示唆しており、現代社会学において重要な論点につながっている。

他方で、本論文で発見された知見を、理論的・方法論的にさらに水準を上げて位置づけ社会化していくという課題も指摘された。本論文を通じて〈わたしにしかわからないもの〉という概念が大きく拡張され、新たな認識が発見されていったが、最後にもう一段抽象度を上げて、それでもなお残る問題とともにそれらを論じることができるのではないかという指摘、同様に、調査協力者と調査研究者の相互関係から、何が、どのように変容し形成されていったのかということについて、もう一段俯瞰的な視点から方法論的に確かめる必要があるのではないかという指摘もあった。〈わたしにしかわからないもの〉が「伝達する身体」となり、

社会に開かれていく、その理路をさらに広い社会的文脈のなかに位置づけていくという課題である。しかしそれは、著者の今後の研究の展開可能性として指摘されたものでもあり、本論文が博士論文として十分な水準にあることは審査委員全員が認めるところである。